

# マレーシアは多民族を どう束ねる？

牛田 晋

内閣官房 国家戦略室 政策企画調査官  
(2009年12月～2012年3月)  
国際協力銀行 前シンガポール首席駐在員)



## 世界でもまれな民族間格差是正政策

マレーシアと聞いて想像されるものは、ペトロナスタワー、マハティール元首相とルックイースト政策、退職後の海外移住先人気No1の国、などがあげられるだろうが、本書はマレーシアを知るうえで重要な要素である「ブミプトラ政策」に、特に多くの紙面を割く。

ブミプトラは「土地の子」とも訳され、ブミプトラ政策とはマレーシアにおけるマレー系優遇政策のこと



マレーシアの顔ともいえるペトロナスツインタワー  
(高さ452m)

を指す。マレーシアには19世紀のイギリス統治時代に、主として錫鉱山やゴム園の労働力として、中国やインドから労働者が流入した結果、マレー系（人口構成比率55%）、中国系（同22%）、インド系（同6%）を主体とする多民族国家が形成されることとなった。マレー系は主として農業や単純労働、中国系は商工業、インド系はゴム園労働など、民族ごとの仕事の固定化が進み、民族間の経済的格差が拡大していった。

ブミプトラ政策は、特に中国系とマレー系の経済格差の解消を目的とし、①会社設立の際のマレー系資本比率、②マレー系に対する大学への優先的入学、③政府部門への優先的雇用など、優遇措置がとられている。ブミプトラ政策に対しては、さまざまな見方があるものの、本書では、ポジティブアクションととらえ、ブミプトラ政策によって中国系とマレー系の経済格差が縮小するとともに、同政策がマレーシアの経済発展の原動力のひとつとなったと積極的に評価している。

## 成長とともに変化するブミプトラ政策

本書の著者とマレーシアの関係は、1970年代央の

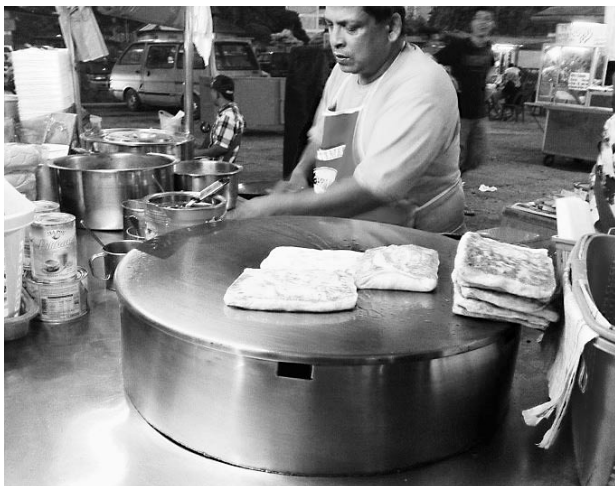


首都クアラルンプールから南方25kmに位置する  
マレーシアの行政新都ブトラジャヤの首相官邸

中小企業の海外進出支援事業においてマレーシア進出案件を扱って以来、マレーシアへの駐在なども経て、通算で30年以上にわたる。いまだ発展途上国であったマレーシアから、1人当たりGDPが8000ドルを超えるまでに成長したマレーシアをフォローしてきた専門家だ。本書は、ブミプトラ政策とイスラム化政策を中心としつつ、規制緩和や社会改革などにも言及し、マレーシアの今日に至る発展を詳細に解説する。

余談ではあるが、私がマレーシアで会った日系旅行代理店の店長は「日本からマレーシアに進出した当時は、マレーシアに旅行する日本人相手のビジネスであったものが、今ではマレーシア人が日本へ旅行する需要が大きく伸びている。マレーシアは豊かになった。当時の状況からは隔世の感がある」と語っていたことが思い出される。そして、本書のタイトル「マレーシア新時代——高所得国入り——」が示すとおり、今後の焦点は「中進国の罨」をはね返し順調な成長が続けられるかどうかである。ナジブ首相は、2020年に1人当たりGDPが1万2000ドルを超える高所得国入りを目指して、都市開発計画や産業競争力強化などの政策を打ち出している。これら政策の評価は今後にゆだねられることとなるが、ブミプトラ政策については、豊かになった一方で、拡大したマレー系の中での経済格差への対応や低所得層の底上げへといった新たな政策課題を取り込みつつ、経済成長を支える基幹的政策として継続されていく。

マレーシアで日系企業の話を知ると、マネージャーや営業スタッフなどはマレー系よりも中国系の従業員が多いという。中国系のほうがよく働き優秀だからと



インドが起源の「ロティプラタ」(「ナン」の薄いもの)

三木敏夫 著  
『マレーシア新時代  
——高所得国入り——』

発行元◎創成社  
発行年月◎2011年8月  
総ページ数◎232ページ  
価格◎840円(税込)



説明をされるが、本書では、そういった中国系、マレー系の見方を「中国系に沿った見方」とする。中国系、マレー系のそれぞれの立場や価値観を紹介しつつも、一貫してマレー系の視点を中心として論を進め、「マレー系国民の力により、今日に至る経済発展が達成された」と説く。なお、マレーシアを訪問すれば感じられるが、多民族であるからといってマレーシア社会が不安定なわけではなく、多様な民族・文化がそれぞれのアイデンティティを保ちつつ調和した社会を形づくっていることを付言しておきたい。

### 次回総選挙で流れは変わるか

本書では政治面にはあまり触れられていないが、マレーシアの政治イベントで注目されるのは、次回総選挙だ。

2013年3月の下院の任期満了を控え、解散・総選挙が絶えずうわさされる。アブドラ前首相のもとでの前回総選挙(2008年)では、与党連合(国民戦線)が議会の63%を押さえ勝利したものの、改選前の議席占有率90%から大きく議席を減らした。中国系、インド系の国民戦線に対する支持減少、建国以来約50年にわたって続く国民戦線による政権に対する飽き、都市部を中心に増加する中間層の野党支持の傾向、などが指摘されている。

次回総選挙では、ブミプトラ政策のあり方も争点のひとつとなりそうだ。マレーシアを理解するためには、ブミプトラ政策やその背景となる多民族国家のありようなどは必須である。総選挙を控えて、投票行動の背景となる経済や社会の状況を整理しておくためにも価値ある1冊だ。

